茶聖像

金

皎月含其睡新碑供養

苓堅塔

南越福井　社中編

序

大雲寺の弟子雲海の雲雲海の雲
海の景皆山程の雪沈而為雲只一晩乃上来
公界寺の住し雲師其臈差大分壮の人
雲和尚藝勢乃冥たれは清涼寺

関宮り幾月を経て廣地芭蕉翁の系統
甘〻千年を経て年毎に僅欠の十余年間
年毎の栗飯拾る間の祝ふ事〻蕉門
一流の佳境よりさかり常ふ教子を導く
切〻て義父の為を哀傷するあり〻是そ
実に此道の正的此序の為めにする所なれハ
先爰に筆〻
近曾塚東杉園なる社中の勧に應〻て

徳林乃梅下り海壌を築き又年毎に学る
校の門より条てふを編み様り彫せあま
ね〻四方におくほ〻てあまの机上をふさは
せ〻ふこに教子等たゝい 時乃年
師恩海長乃言源感するにあり以至祝
ものとくハ
老師乃生涯を受ミ万古
に義名を残すを潔に一致〻て
其方を成ふ何けるり何乃遺跡の頌

かゝいに云ひて稲舟のいるかみて
ゆゝしなれは望もとハ宗立角童
なるあしたを泡沫と消去事しち況
に口惜く誠きはあるほとを計
るに付と思あるに　彼東西師
の三類如是警誡乃先聖あり是実義
の嫉ちなりと松つく所およ論記ようり
ひろにこのようあ次あ紙紙ハ

三

其聯乃俳号を警戒ようて譲りて生涯乃
ニに乃定ちしめ対餘の俳壇高唐童
乃諸者と愛俳七名のすゝて教子
を導んるを者ていくらくちのんなるの路
系徒のさ程をひ何ハ如んと知る紙
とりかを　老ハ志そ思怪しい俳道と隆
面白しくをを知ての者意乃如左ハ今
ようけを阿者乃俳号を同者ある也の英歌と

四

阿弥陀堂の左ハ法華寺の領の所にて
此所ハ中古石工りの所にて
成就せざりしなり
八下ちのりまして牧ヶ岡といふ里なる長安
寺の境内に濃の古墳師の塚あり
是ハ一株の一所
此地を清光 光師の
眼を写しかたるものなり

此白ハ徐風菴師の
業を受られ
もてこれを生ずるなり
許証をうけさるハ用ひ
いくらこれを
男をもかし
らんかし

の一白を石面に
称へんかたに
絵ハ再び風雅
墳前に

そつる道ちさりて菊子の後列をゝ
て苔〳〵久相〳〵羅ぬ

安政丁巳年吉月良辰　教子　壽井梧桐

兄弟勝手を世塚ふ名を慢て今ハ
酸月金乃弟北之学り紛れり
赤又連宿ふ年の老ふるをもて
ちを以の話を繼てうやさうの
世安精金子あんもう人くと
とふ井伊養のこころを述る.

花ちやこの下かけ世塚の記　菅吹

月も赤ろ〳〵世乃曙　葵生

鶯疲ゑ〳〵ふ鶯ふ偽ありて　古玉

成世形るふをいと待る　南晴

簾の外ゆかしく思ひつゝ

高機

もゝ千ゝ引より清き堀川　石流

数乃光うせぬ黄金の古月雲　清香

鍛冶かなまくら清の深い　石水

礼拝て無事をへて給りぬ　西面

築山めぐり奥ふかき庭　故麓

勅諸の宮寺一位　吉桂

幸い殿る子母神浦浪　龍宇

重ねれハ明の理りぬけて　如泉

ゆるぎなき巻軸の移るあり重　洞渓

ゆ紀松ぶる海岸の松ハ古ふ　山月

寄ゆなたるの迷ふ初ア　波龍

枕勝ぬて夜寒ふ寝あく月　梧桐

ゆ行て扇も高坊ゆ素　雪光

雪傳ふハ精る多くる後　星雲

雨の遠山ふ物る土嵐　陶水

帰閑てちる迄梅を見て仕舞　香菱
志のひの酒成俳味地炉縁　麦志
二ヨ
鍬能乃かゝ見を迄江源立扇　梁星
雪く彼書四方八方　可矣
雪ふる〳〵風の吉ふ八松明す　南旭
ちりな紀井と初て加くまふ　蝶花
哀も新〳〵思ひの色を墨で深　憔渓
見くらり〳〵て咲るう紀雲　露丸

ちちくハ見代杉ハ二葉雲　柳雄
子蒙祭ちく初るおか家及　鳶曉
講訳の弟子乃恵ふ宮をかう次　一唐
遠紀四金も迄紀花俳日　里水
先キへ行尾ふつく牛の春ちて　東箭
板目ちゝ〳〵からく弦弱　為川
多細工経再も載一月の唐　拗史
哀乃ち形を乃源出指先　松東

二ウ

義をもち孝をかつの江庵うし　韋静
咲も伎へをたてゝ琴記　子雲
常盤の池尺過る夕晴可　信誉
すれな賛言と人を知る　之牧
笠の文かつ和睦のお法のいふく　他河
糸弁の言ふけつる哀糸　曉雲
徐の南かゆりハきるふ　巻例
月乃入さ紙いきく移を　羽江

阪陀袋言も月乃ちを産耳のつと　子例
けり奢の慈ハを形れて　ゐ之
旅ひの電乃掃除おけ　芦舟
法慈慈法る公礼観　嘉仙
けつる人おとうめそ也壁　乃橋
嘉子入字法の山誠へ　金南
三ヲ
佐保姫のをさる色を帝く　芝風
普請ハいつれ方角と結言　祖有

加茂をつくろふ老のちからめより　琴糸
佐幸乃列ふかるも運　春河
日の氣の雲向ふるもハッより　舟星
古敷をたづく村のお渡　舟曉
猿縁も功徳堂童の拝地義　有隣
勾引されるふ迷ふ彩も彩　雨柳
ちとり寝の夏ハさすもふ庭の山　花洛
つをけしゑんの雪のきぬく　風化

本家をとるやいかやって紀角　仁山
おれら年貢も茶て年分　佳蔭
右かして月ふ徳られハ同氏　李渓
屋うて盛りとなる繋り仲　玉洞
一ゆれの岩楽しの板温泉の通て　恵佛
藤籠乃縄のこけし岩角　碧川
ゆくら屋ふ徳ばかりらの猿股識　星製
茶をたきまの数ある宮つ人風　卜沿

池ーさ紙磨てつりし湖月抄　星槎
いまはむかしの延宝五和　智二
新へのもくく寄をとゝ鹿ふ嘲　素翁
拾を扇を掬ふおきてある　秀甸
注さ長ふ風ハ桂の新ふれ　素桂
輪使を仰ぐ略の移帝　魯雲
言言るくゆをんきれ一楠のたら　吉碌
仏師の図を拾ふ文集接吟　鶴夕

とのをのもをもつれふりとも矣　秀水
ふふはらぬ子をもをもをもをもを鋒　布狗
ナヲ
角ちの程のとける河素泡波ら　柯石
まけて居るのもも年の切あり　文雪
式日のち味ひりハ時ふつり　佳友
吹ちちしいる砂の河書　吉涼
水ふさぬ恨ふ凝てけし坊主　磯白
仏ふくて短夜を注　蓬矢

ん変換語の例 一 純子　英巧
新の動詞系市の羅　可業
紅いの紅ふ落葉　歯化
孫ちて歩く軸の臨玉定　吉雲
ちや繰の千子と言れた袖の内　等秋
麻炭の言ふきを伝ひもれ富　里友
約嵐月ふ先ちん雲の布　周化
猫頭ちや言のい彩く　子雀

ナウ
純の言葉紙ら涙る弁の袋　李仙
おもハぬと言へ嚴ら雨濡り　嬌柳
雅豆ハ言ふ九古紙を流次答　言東
廿日乃里の条ふ知れ書　可雪
言葉とは形とりあれ杖の動　雲敬
袴さらへ〳〵ふ涙言の宛　友和
物糸〳〵又言かへる言年のも　桃紅
号〳〵ふ言葉を子里営　雪梅

六百歌仙尾

おのゝ佳業の吟は候月舍の
文庫ふかきめて留り雪中
歌を解る

かゝるとゝろの八盤とゝろ不ル
ちる花ふきさそはれて飛雄可南　牧給信　南晴
如月や花ふかゝる雲の色四　雪間信　如泉
　　春佛

業の京乃春や新墨る雪の氣色　芳川
山里の燈ゝうとし春の月　星桃
降れ柳時雨はを北新氏哉　程有
能くふ人新ちる紀沒千家　習二
蛍やもゝうちもよ紀孫乃為　琴糸
二月ふ燈ゝ人ゝ有ゝ山　卜沼
仰ぎや刀降ゝまふ新日敦　星夏
おりふゆいとて戻らや繊月　春河

梅の巣やと盗人乃志乃道　芝風
英多の素足ふ舟は嵐ふか　桃紅
笠や雨屋とりて杜の奥　右岡　舟嶺
花の顔やせんかもなき雨乃春　牧糸　星照
風流を引ん為らして花て為　岸水　山月
ゆ雲雀時や車ふ眠る牛の主　甲谷　陳蕉
湯茶やしり伊る溪底　玉光
苔代やつゝと初る日北恵　猶井信　石徐

月乃如て又ゆめうゝ横ふ　玄機
年〳〵ふ遊て身ふの柳ふ　香菱
つゝ花〳〵笑日乃しも汲干ふ　碌自
花動と主ゆゝう那蝶の徐らふ　主花
蔦やいつて家ふい年とりし　花流
糸ゆゝや岩孫ふ僊て仲おり　東籬
世粉や家の好ふ丸蒙人奴り　蓬亦
巣の花やおらんのかゝる尾京根　石水

二三梅花を画くや富の門　秀水
月や桃樹すこしする霧の夢　羽橋
名乃来て風形見の乗り物　春桂
夕風や花のはらふ物はたて　清香
雲の中歩行おもひや櫻狩　羽江
山里や岩を四方の一元亭　李淀
乙鳥や菓一ぢちを菓の右兎　春納
彩つ菓ふり古り吉して春の雨　布路

ちるとあう永光ちりや雲の花　慧淀
お里かとう春日のはるやどの旅　周化
縫ふ筋や切菓子つきし足の跡　仁山
燕の体て春ろや拾菓鞋　弁里
笠とんー神祇山の春ろ家　可笑
雉子鳴や月影ろ鶏あらし　韋静
雲ろり月の恨ろりも春歩術　他行
菓叶や釣の手編もうちくこ　壌柳

和歌やうくむ尼小間の縁記　子剛
蜂の巣や通用の扉ふ門　巷海
順逆も儀らさてまく櫻哉　雲仙
雪花夜をつゝぬく物のかゝり　五六
ゆるとて夢あり花や生涯　芦舟
いられある家の風情や物の宮　等秀
和物や四合仮巷八茅葺の紀　三雲
白雲乃中ゝらもぬちゝ小　陶水

ゆゝふ雉乃澤あれ春三月盡　魯杏
人あのもゝ夕〳〵や弥生山　柳雀
片枝八流ふい春かゝ紀柳ゝ羽　秀南
答上ゝく矢ひ仮ゝや春花雨　青雲
も志ゝふ雲もいゝ春や新雨　佳友
や落の巣や見上ゝる雲の五　抱
俊年ゝゝ後ふ笑ゝや雛ゝ嶽　佳帝
七間さや治りおゝれ須方の弦　李仙
雁曉

青柳の枝をぬけ出る馬かな　馬夕

乃の節から解ふりにの氷　風化

薄雪の山ゆけのやきしの夢　信堂

跡次をもて越す守や秋の月　其雲

葉のもとより咲く朱の小宮哉　里水

乳母ら紙をあれて縫の弦仕ぶ　子雀

池水ふ月をうこかすを怪可能　青鼠

白梅乃香や青月のほり変　雀北

美美や月おすてさうれ花踏　里友

雨それや羽つるよき嫁ひよん　可栄

老松も時こそいたれ緑ふん　笑巧

月高し鄙ら峠く花の宮　珊石

蛍や明るき声を仮寝の栗　可雪

も代やまの鶯鳴ぬくい椽　金雀

彩の子ら楽しでいふ月永ぶ　雲敬

美雪や柳のかげ北作打戸　雲亭

暮かゝる雨よりそやし柳雲雀　俳　洞渓

破人うとんらゝ冥や物ひちり　王洞

雑子帰て恍々志ゑん冥ふ　文弓

ふ流破や春よく柳をゆてゐる　有隣

山吹や乎かゝ雨れ皇ふちり　栗窓

蛍や尺ゝり蛍仕ゑもの　女　万川

朱一殺て部て時河ふ春の雨　一唐

春風や月ふん紀羅沙の孫市　暁雲

きゝすふハ名殊きゝすゑ子の妻　雨柳

隣お紀弟主ゆゝかりて日永ふ　弓漁

和ゝうふ冥ふ〳〵蔵ゝや麻の角　甫旭

姑や春ゝれてかゝふ冥ゝうり　柳史

弱ゝ弓や雨戸れ吉にゝれておく　鶴屯

也ふ冥ゝう旅のゆけや時弓　龍也

ゝる風やゝうれふゝある波の佛　雪弁

遠蔦の帰乃吉や鶏かゝゝ　故雀

うらかや数の釣舟屋ゐる永　正甫
舟小枝をくゝりふうこく柳哉　志桂
妻面や板屋へ寄るゆうりう　玄東
磯ハ伽藍のいとなんけを　友和
根ぶ志かゝて櫻花ちる日哉　世物
変てさく梅やゆ武士の素の門　古玉
常盤ゆ妻の際あり松のを　奏生
花持ぬをれ仰ふ妻の雪　梧桐

各様つゆし同桶の泡や朱巻花　芳吹

余奥十ヶ月表

くもや雲紙へうるゆ暮り　友和
みゝ寺の鐘居ふあら孫と　梧桐
あゝうきて泉つゆ世に放竜　葵生
むゝかへる古代の碧沢　玄東
素人となりて姫入の白小袖　世物

陰子かそ目ふ眠く呼　叔雄
吹きとも大名舟のさるもつれて　古桂
ロ文て自然とうるる汐時　露丹
簾能の月を抱つ花津潟　古玉
尾花もとよやそうるる消　西翁

席外各詠四季混雜

春うれ山下ハをやし春九草　蓼聲叟
蓮一葉水をかれりる五月雨　嵐石
うれ笠やおもひもよらぬ岸の咲　昧唐
納豆乃もや岩の蓬たるぬうる　花女夕
京ひ人ふ多て星ますり　桃女紅

府中

紅葉や唐きと紀石の色　宗鶴
菜花戸小窓をゑん初つゝ彩の秋　嘉山
猶紙の笠もすゝてて茶摘ゑ　拾雪
きゝ嵯や鶯のうさい落くゝき　芦笛
かゝく日新木槿のもかをきり　陶碎
人あゝ知れと氣のつく落葉　仰芳

朱雀乃ちる淵て落の月見哉　柳塢
節分の夜やゆて亥粉の宮　晏苑
蒙かれ小雪れ来て岳川枇杷花　遂路

同所

吹入し花小雪新れ乃り　左満年　尤淫
もとれを月の解り風見茶　西軒

ちりて又おろそを度し庇代　雲柳
漂ひるも友ハすれあり蜂の巣　雨紅
茅舎の猫ら洗して出る老　震常
又れり点也後やおとき次　光孤

同所　出岳社中

赤笠の新さん奴えぬ奴畢素　双露

雨さえの日数ちら氣や鶯橋　友垂
おそくとも同ふちるなよ萩の花　紫圃
紫ふちらや美日雨形紀香の巣　雨鄰
嘘のおて起さる　巨燈の松　郁雲
会逝る日数を二日の金沢　玄雲
別あふて歩し安さよ弁吏人　鴉汀
出撫さる人ら嘘ふし初さら　等陳
小雪まて風きる吉や山ん歩れ　雪吹八十五歳　蕾祥

一さと松雪の白ひやと燈　太田　二雀

雲月や木の間ふ光る細流　村田　星翼

筆とるや松に寄ても花の高　鶴石　星香

何ありと一味ありたり世の清水　栗田郡　秋鳥

撫子の絶しく後の月見ゝ哉　岩本　吐逸

淋しやゝ定ふ夜なきゝ夕暮夜　日ヶ窪　楽山

おとれし秋を見ふる一葉ふ　行小　花桂

垂れや通ふ風の迷ひたゝ迷　二雀

雪一羽まる枝ふやゝ初時し　太田　雪涼

湯気や白ひも堂ふ結る菊　杤谷　青泉

咲かさ法灌の遠き涼雪ふ　桂池　梅吉

乗のふや燈くる古屋菱　牧原　清花

秋の吉の年たゝ見や降り花　菜園

秋とゝ有ふ上る山やゝ雪の称　八十谷　柳雯

雪の巣や雨の降ぬ日の素　龍河

風毎ふ雪の岳遠ふ笑ふ　玄旋

布の葛を屋ふの屋や蛇牛　田ノ谷　雲雨

明ふ物取ていろるこゝろ　花明

涼しゝ秋を明しらる空の月　桂趣

蝉時やぬれ数珠もゆる屋の雨　谷徐

雨風もさらぬれるや丁京紅　如是　智之

二度こゝ変よけてもつかふ空蛍　石像　京水

禁制の札さ紀かゝ民ふゝゝ船　古拙

ひさ雪や志げ〜雲の明り石　二百市　玄風

穀の言葉数えり尽ことり　信和

夕風ふ遠れてけりや蝉乃鐘　浮樓

ゆとゝきの乗ふ月見る猫長ふ　計尓　高金

汝見の出りいゝえて能月　玄春

牡扇おも涼よゝそ機ゝ分　森内　如帆

月紀の陸ふめれて附ふ小　金内　雲舎

雲の挿数中ゝよ一後の月　雲岳　理中

旅の丈さ七ひや岸の桃　女　布葉

四季の言葉のありて苔ふしき　女　ゆき
初霜し散もうつるや夫蘆　仝　香嶽
苔ふんぬ岩穴ふるや汐干潟　大阪　芦角

九岡

糸くり後秋寒れ閑子金ゑり　三巴

徵山

霧れ羽をの欲ひとをり雲の雪　俳　沼上
写真を厨祝くや秋のくれ　五風
ふんとれ小流数子丈の花　吐閑
風ひとをれくや懐の夢　碧思
蓑ひとり茅渟て居る清水汲　渭乗

大野　三十月連

蓬ヶ島や痺ふき染し絲かしら　近雪

捨扇人ふぢとはなりけり　南條

編事や夜居の雪の眼の哭　文鼓

物白しとうんとさるる朝日哉　有夢

逢ひた孫娘けふし流れき迄氣　朱玉

朝青の流眉やふ蛾女帰の姿　李朝

月氣とおもへ夜の秋明るう京　於琴

氣ちりてから白もまた青柚子　隅内

お物や月ふきさめて多の夜る　茶翁

ちりの多の羽つうひまし五月雨　羽吸

赤肩をくへる赤桃の枝きり式　雲翠

心住りあれても休しの深子多　二鼠

樹嵐の中ふ肩ゆりり枯柳　三巴

出巻ふしう蛾ふ蜜ひや漁村　有也

かきる学とありてめてたき兜式　乎泉

淡ち氣かる郭上ゆや夜の月　吉賀

ちん雛さへ無しとはかなめり　素丈
山寺やみとかすへて人の歩ぬ　汐帆
猫引や智あるものらも百合食　茶夕
蜜蜂や赤ん坊を移る蜜の匂ひ　素流
立ぬれば次の数なりもの哀　一角
大無れば花振おろしおき性　梅二
ゆ仏や釈ゆかしかりし節の数　砂井
梅雨ぬれやもの寂を後ゝ母　乎仙

蛍ぶくろ咲ぬ　乎丈
花乃数を齢乃花やかう佛光　路風
時捨のゝ夢言ゝ秋の蟬　乎亭
池乃のうち初る蛙の風　汐乎
有明やおぼ波ゝ立て花乃雲　乎夜

三閑　百和山連

さくらさかる野や麦のこかれる人　路舟
宍川や物縫ふいむ糸柳　一慶
絵や歌ふらんの白面仏　支邦
声位つ和ふんからん悩や物の書　物史
世のかりる星のひ糸や蛙の風　花栖
蛙鳴ぬと志るや油売の足さうり　韶舟
小庵の春かる隆家や蕨摘　祐翁
ふる人のひとりて来て百日紅　吐月

稲妻や月たきもせず鬼尾　響水
屏風をうめさるるの之介　青旭
狐穴ふ物を分れ方うれ　春命
京土産小黄皮仕雲や朱の子猫　捷之
竹芝やふ訓ぬ僧の秋野ん　朱夫
結ぶらしとあらら雲一泥繋係　呻也
もの間しまのあかきや時雨　蕙渓
初しぐれ小竹よりぬ風の嫁　春亭

深秋をくらくてぬむ桔梗素　可堂
接られて元良次秋乃柳の葉　里水
かりる紙ふついてもゆるて柳哉　只豪
雲北名をとゝて遠涼の素　弱蹄
ゝるをもて懸り渡りの春の雨　竜嬉
鍵汁や味噌又二度の味　有秋
撒ゝ徳もして嘶沢田哉代　一井
斬洩るゝや浦ふの窮所哉　瑞芝

人乃名を物ふもつけて蛙乃蓑　文士
奥羽の境ある秋山てふ温泉ふいりて
湖の岩遠ーはくらふかとき夜　故井
うと星

福井

孫数のまふ初くも浮世北唱子哉　吸太坊
紫陽花や僧ぬおろ元を色ふ咲　春山

に京の つきて 新菜ぶ　梅映
鶴坊の市なよこしやもり蔦　青柳
簾や志賀つゝ中ふ帆のたゝ　芳苔
松風も たえ志賀や宗子雪　あや
つゝ子鶴 梅ふしかさや夷の面　梅流
さゝ波と四海ふんせてまる 嵐　玉山
菜の花の宗やさゝ雲ちる沈沖　桃涯
四月のさゝ波ふも 嵐ぶ　路逸

月ふそふ志と青のかゝめ家　稲波
ひのもゝ 強も 柱やあき　耕雨
蝋の糸きれてつゝる嵐ぶ　伸昌
初雪や白根うかゝの 揚山ゆも　就波
月ふ消て月ふ 嶺とや 富士の雪　百子
菜のもとゝん 家さかや 蝶 ひ　和ひ
ふ雪 節やゝちゝる月の波ゆ ら　和風
きゝ 雪やゝ 声ふ おふ ら や　雪屋

竹に雨て日暮しぬるくやまの雨　六七
弁の子も机ぬく汐やさ月曇　俤　蔵井
舟引の足場小指るさ紀行　三子代
名の称くら用さたんかけや冬の月　磬江
廿月雨暮るとあふくれふくり　有笠
松示をいて砂踏あれさるれ　花泉
菊の示ふ白引ぶれり庵打戸　梧栖
夜ふとり好るをんの弟を指行　春吉

山吹乃氣をそそえぬ流す南　吉峯
蜻蛉や風ふ居出る竿の先　春二
鶉乃音のきえれ吹えつ暮原　梅林
又机ふ志はしの夏やまの月　茂山
人の氣乃つるぬかほりや花ふ蛇　秀由
学乃姿ん世ろり指ぶ〳〵弁　宜交
いさ紀よく暮る樣のかまれ行　弧仙
日短を志らぬ氣あり油煙　花牧

月氣の四海をぬきて岸に水　梅林
鶯春の夏の灯籠や留記　井水
星屋る庭ふ香のはり西の後　西雲
雨上り雲から月れて青はし　梅子
破さめふ子雲なる色の月　西夕
夏夜の梅や南をうけ一高　布泉
影ふ月燈ふ月して夕月　山曉
浪子鶯る雲百梅ふる汐子ふ　雨芳

わら雲や風のさそひ月元称せ　一雪
たいそつ月始せ　星拙
笹紅の燈ハ生ふ　南校
見ほとふ小魚ほ　芳金
妻かれやそや松人も内仕事　香能
ふ蛍や　垣根ふ子ハ跳　西香
紅ふ雲月ふ高ふ　汲壌
夜半の夏破るや　菱象

青柳や猫ゆ小糸乃かり柱　一風
年ふる川岸の登高や夷の面　雪乎
月冷や茶ゆし海ゆ出る月　風月
歌山ゆ夢を結して帰る丁　吳竹
哨人の尾ふ粕のつくを焼る　雲柏
時雨ふる人かそへられ九十九橋　女　寄柳
花色てさらら都ふ茶摘る　琴女
ほかへ出ゆ茶屋ゆや冥の裏　玉女

茶乃花のまひや茶ふ裏ふ水の色　雪女
夕をへや和ひらむ秋乃やま　青海
出ふ波からしたゆの水ふ　杜流
一面士の茅をこて術して霞ふ　悠里
学ぶうらかと文俊侍ちり　去定
笑ゆや比一里ハ当れ乃　呼春

祢さめの里なる佐川ちりつを
たゝきて海潮うの仙話をゝんと
さるふ茨ハあうつきふあんゝとに

ゆ〻を笠のゆゝ
おそらや夜の雲

清水先人

遣吟

ゆゝ〻ハ
ゑゝれとをゝ紀
いのちゝ

破月舎
其勝

福井柳町
吉官壽刀